

## 特集 自ら学ぶ力を育てる

「気づき」をうながし、  
自ら学ぶ発音指導へ

田邊 祐司 (専修大学)



## はじめに

近年の英語発音指導では、教師が「教え込む」のではなく、学習者が「自ら学ぶ」アプローチへの転換が提唱されています (Morley (Ed.), 1987)。では、その「自ら学ぶ」とは具体的にどのようなことを意味するのでしょうか。ここでは 24 年度版 *NEW CROWN* (以下、24NC) の *SOUNDS* の例を紹介しながら、その問題にふれたいと思います。

## 指導上の問題点

発音指導の伝統的なアプローチは；1) 直感・模倣的手法と、2) 分析・言語的手法、との2つに大別されます。私たちはこれらのアプローチと付随する指導技術 (例：listen-and-repeat, 口腔図など) を適宜、組合せながら指導を行ってきました。

しかし、こうした伝統的アプローチが効果を上げてきたかと問われると、残念ながら YES ! と断言できないのが発音指導の現状です。生徒が発音を苦手とする原因はさまざまですが、教師が一方向的に教え込み過ぎるのも、指導上の問題点のひとつと言えましょう (田邊, 2007)。

## 気づきをうながす

以上を出発点に近年の指導論では、教師が最初から教え込むのではなく、生徒の思考を誘発する活動を介在させるアプローチが推奨されています。活動を通して、入力 (input) 項目と現状の理解度・技能レベルとの間に横たわるギャップに気づかせ、自己修正を図ろうとするものです。つまり、気づきという自己認識を通してはじめて、入力は「入手 (intake)」へと向うと考えられているのです

(Schmidt, 1990)。これが「自ら学ぶ」の意味するところです。

具体例を示しましょう。先般、出前授業でとある中学校を訪問したときのことです。そこでは、plan の pl という子音連続の箇所、日本語母音の「ウ」を入れて、「プラン」と発音する生徒が多いことに気づきました。

伝統的なアプローチだけで教え込むこともできましたが、まず私が採ったのは話し合いです。英語母語話者の plan (発音機能の付いた電子辞書) と日本人の「プラン」という発音を比較させ、違いを考えてもらいました。

話し合いの中で、日本語の「ア」と ash の /æ/、「ン」と /n/ などの違いに加え、pl の連続性に気づく生徒が複数、現れました。そこで「では、続けて pl を言うにはどうしたらいいのかな？」と発問し、さらにペアで、考えさせてみました。すると、どうでしょう。「上歯の近くに舌をあらかじめ持ってきて // の準備をして、それから /p/ と言うと、/pl/ と連続して言える！」という答えが出たのです！そうです、気づきから発見が生まれる現場に立ち会った瞬間でした。

彼らを徹底的にほめて、そこから子音連続 (結合) が英語の音の特徴のひとつであるという解説を加え、practice や school などの listen-and-repeat 練習へと移ったのは言うまでもありません。

## SOUNDS の特色

このような気づきをうながし、発見へとつながるアプローチを、24NC *SOUNDS* ではさらに拡大して導入しました。気づきを重視する *SOUNDS* は、「発音とつづり」と「英語らしい音づくり」の2

部仕立てになっています。前者では個々の音の発音ポイント、および発音とつづり字との関係を扱います。後者では英語らしい音のために必要最低限の項目を精選しました。そのために音声シラバスを作成し、日本人にとって困難な音声項目をリスト化し、そこから各レッスンに配当するという形を採りました。

SOUNDS に込めたのは単なる言語事実 (linguistic

facts) の提示だけでなく、上述したような気づきをうながす活動でした。

「発音とつづり」の事例をひとつ紹介しましょう (BOOK 1 LESSON 4)。この活動では、「同じ音の仲間探し」といった一手間かけた活動を通して、基本母音字には「アルファベット読み」と「フォニックス読み」の2つの読み方があり、アルファベットの発音は単語に組み入れられるとそれぞれ変化するという事実への気づきが起きるように目論んでみました。それから、「e で終わる語において、e の直前の母音は二重母音になることが多い (face, like, nose)」という副次的な「発見」につながるようにも工夫してみました (例外ものばせてあります)。

今ひとつ事例を見てみましょう (BOOK 2 LESSON 6)。これは同化現象 (assimilation) をめぐるものです。同化を扱った従来の活動は、「変化している箇所を線で結んでみよう」といった類のものが多かったのですが、ここでは活動の処理水準を高め、「単語内にも音変化はあり、変化は単語間でも起きる」という事実に生徒が気づき、発音す

BOOK 1, LESSON 4, SOUNDS

SOUNDS

●発音とつづり

下線部の音に注意しながら、 中の単語を聞いてみよう。次に、下の表にある単語を発音し、下線部が同じ音の単語を  内から選んで ( ) に書き入れよう。

bag but clean home hot leg music nice pick take

a	cat	( bag )	face	( )
e	ten	( )	Japanese	( )
i	six	( )	like	( )
o	dog	( )	nose	( )
u	fun	( )	use	( )

BOOK 2, LESSON 6, SOUNDS

●英語らしい音づくり

左にある2つの単語を続けて読むと、どのような発音になりますか。似ている音を持つ単語を右から選んで、線で結ぼう。次に、英語を聞いて、あとに続いて発音しよう。

- |             |          |
|-------------|----------|
| thank + you | • shoes  |
| did + you   | • choose |
| can + you   | • June   |
| meet + you  | • new    |
| miss + you  | • excuse |

{ miss ~がいなくてさびしく思う }

るときにもこうしたことを意識するようにと願って作成しました。さらに、y (/j/) という半母音は直前の子音に「飲み込まれやすい」というルールに気づきが生まれれば、それは編者冥利に尽きるということです。

おわりに

伝統的なアプローチはもちろん大切です。しかし、最終的には学習者自身が自ら意識し、自分から学び取ろうとしなければ、発音は身につけにくいということも、また事実です。気づきを中核とする、教え込まないアプローチをどう指導に取り込むか、自立的な発音学習への鍵がそこにはあります。24NC がそのための起点となることを願っています。

[Further Reading]

田邊祐司 (2007), 「発音指導見直し論から: 音声コミュニケーション指導の「常識」を検証する」『英語教育』9月号  
 Morley, J. (Ed.) (1987), *Current perspectives on pronunciation: Practices anchored in theory*. TESOL.  
 Schmidt, R. W. (1990), The role of consciousness in second language learning. *Applied Linguistics*, 11/2.